あなたと同じ瞬間を過ごしたい…

SEGASATURN

私、家族と離れて暮らすのは
生まれてはじめて。
ほんとのことを言えば
少し淋しいし、なんだか心配。
あなたのおうちで
うまくやっていけるかしら…。





ROOMMATE

～井上涼子～

'97年2月14日発売予定 価格 5,800円(税別)

セガサターンの時計機能をフル活用!
RCS リアルタイムコミュニケーションソフト
これはもうゲームとは呼べません!!

初回特典は期間限定のW特典付き!

初回特典 オリジナルキャラクターシール
(W特典用応募券付)

W特典 応募券で当たる
豪華オリジナルプレゼント

応募期間 「ROOMMATE」発売日から1週間
(当日消印有効)

抽選で
- **10名様に** バレンタインデープレゼント (井上涼子ボイスメッセージテープ付)
- **20名様に** 「ROOMMATE」オリジナルセル画
- **50名様に** 「ROOMMATE」オリジナルテレカ

◆抽選にもれた方全員に◆
「ROOMMATE」オリジナルポストカードセット





♪ROOMMATEイメージソング
「もしもここであなたに会えたら…」
1997年1月25日 IN STORES
カラオケ・ポエム収録
唄●井上涼子 (藤野とも子)
DPDX-5025／¥800(税込)

DATAM POLYSTAR
株式会社データム・ポリスター
〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-11-1 松本ビル2F
☎03-5721-3233

ルームメイト

ROOMMATE

～井上涼子～



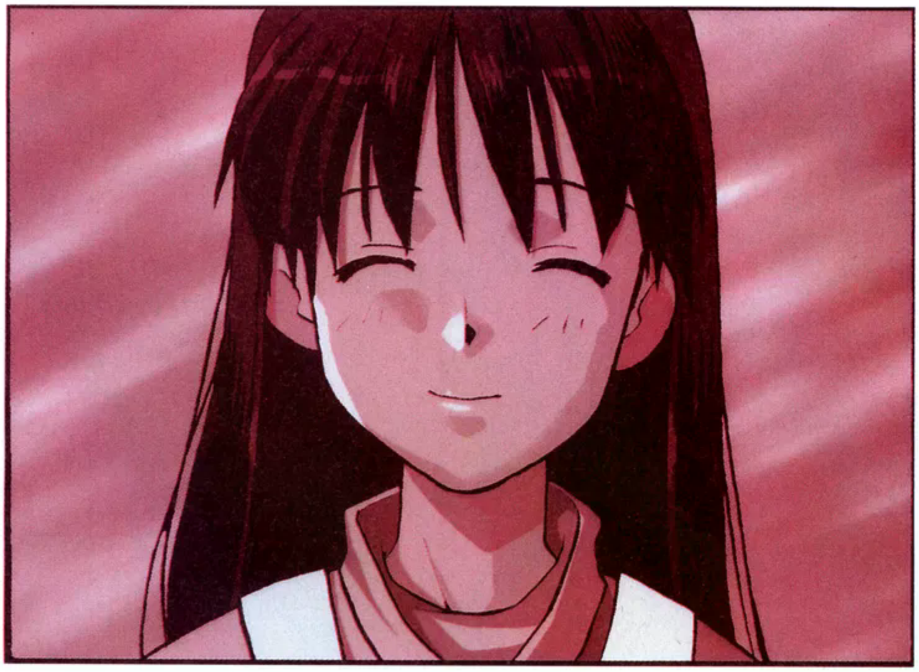
これは、あなたと涼子の物語…

文／紺野たくみ
イラスト／たくま朋正

ある冬の日、彼女は突然現れた。それが、おれと涼子の物語の始まりだった……。

1

「う〜っ、寒い！」
　ＪＲ中央線、Ｍ鷹駅ホームに降り立ったおれは、思わずブルッと身を震わせた。
　２月に入って、寒さも一段と厳しい。身を切るような寒風の中を家路につく人々が、黄色い電車から続々と吐き出されていく。高校１年のおれ、大沢悟もそのひとりだった。
　両親はこの春、福岡に転勤した。おれはひとり暮らしがしたかったし、留守を預かることになった。だけど、おれはひとりじゃない。とても可愛いルームメイトがいるんだ。
「ただいま〜」
　玄関で靴を脱いでいると、奥からパタパタと小さな足音が近づいてきた。
「おかえりなさい！」
　白いエプロンをした少女がにっこり笑う。まっすぐな栗色の長い髪が揺れる。澄んだ大きな瞳をした、明るく健康的な美少女だ。
　彼女がおれの同居人、井上涼子。17歳で、高校２年生。うらやましいだろ？
「もう帰ってたんだ」
「今日はわたしの料理当番の日だもん。期待しててね」
　涼子は胸を張った。
「何か手伝おうか」
「いいよ、部屋で待ってて。ひとりでいろんなお料理ができるようにがんばりたいの」
　涼子は譲らない。彼女は真面目で努力家な



読 む 前 に …

　このショートストーリーは、セガサターン版リアルタイムシミュレーションゲームソフト『ROOMMATE〜井上涼子〜』をもとに、本誌掲載用に特別に書き下ろされたものです。
　なお、このショートストーリーの本編ともいえる物語が、今春４月に小社電撃文庫より、小説『ROOMMATE（仮）』（価格未定）として発売予定です。執筆は今回と同じく、紺野たくみ先生。また、今回のイラストも担当してくださった、たくま朋正先生による描き下ろしイラストも多数掲載される予定です。
　──あなたと涼子ちゃんの、もうひとつのストーリー、今度は小説で楽しんでみませんか？
　紺野先生、たくま先生へのファンレターは、169ページの宛先「ROOMMATE」係まで。

んだ。そういう所、かわいいけど、もう少しおれに頼ってくれてもいいのにな。
「それに、ほとんど準備は終わってるのよ。あとちょっと煮込むだけ」
　涼子がキッチンに向かう。じきに、たまらなくいい匂いが家じゅうに漂いはじめた。
「ごはんができましたよぉ！」
　可愛い声で涼子がおれを呼ぶ。
　今夜のメニューは何だろう？
「お待たせっ。ロールキャベツとビーフシチュー、涼子特製グリーンサラダ！　ねえっ、アスパラガス好きでしょ」
「あれーっ、なんで知ってんの？」
「あら、この前そう言ったじゃない」
　涼子がじぃっとおれの顔をのぞきこむ。瞳も薄く茶色がかっているのがわかるくらいに顔が近づいてきた。これって癖かな？　こっちはドキッとしてしまうんだけど、涼子ときたら、こういうことには至って無頓着（ニブいともいう）。
　触りたくなるようなサラサラの髪からは、シャンプーの香りがする。すべすべの頬、ピンクのリップクリームしかつけてない唇は、とっても柔らかそうだ。
　彼女はテーブルに両手をついて、身を乗り出した。ああっ、涼子、そのポーズはいけないぞ。けっこう胸が大きいってことが、わかっちゃうじゃないか。
「ねっ、どうかな？　今夜のはちょっと自信あるんだ」
　涼子は少し首を傾げ、クラクラするような眩しい笑顔になる。
「……うん、旨い！　こいつはいけるよ」
「本当!?　うれしいな、よーし、どんどんチャレンジしよ！」
　おっと、張り切るのはいいけど、ちょっと待ってくれ。この前の『リヨン風なんとか』ってのと『ボローニャ風なんとか』ってのはいただけなかったんだ。おれは焦った。
「……洋風もいいけど、和食も好きだな」
「じゃあ今度は、煮物にしようかな」
　おれの前に座った涼子は、ふっと考えこむような表情になった。
「男の人って、やっぱり和風のごはんのほうが好きなの？　みんなそうなのかしら」





少し憂いを含んだ表情の涼子は、とても綺麗だ。そんな切ない顔をして、いったい誰のことを思っているんだろう。
「さあね、人それぞれだろ」
（この様子じゃ、おれのことじゃないな）
おれは涼子と初めて会った、一週間ほど前のことを思い出していた。

＊　＊　＊

１月の終わり近い寒い夜、突然、玄関の呼び鈴が鳴った。
誰だろう？　親父たちはいないし、客がくるとも思えないけど。
ドアを開けると、そこには……大きなボストンバッグを下げた、見知らぬ美少女が立っていた。赤いハーフコートに白いセーターを着た少女だ。くったくのない笑顔をおれに向け、ちょこんと軽く頭を垂れる。
『はじめまして！　井上涼子です。今日からこちらにお世話になります』
顔を上げた彼女は、はにかんだ微笑みを浮かべて、頬を染めた。それを見た瞬間、おれはドキッとした。
（うっわー、なんて綺麗な娘なんだ……）
それが、親父の親友の娘、井上涼子との初めての出会いだった。
彼女の父親がアメリカに赴任することになったものの、涼子は日本にとどまって高校を卒業したいと望んだ。だけど都内に親戚もいない。そこで、わが家で身柄を預かることになったのだ。
最初は驚いたし、戸惑った。だけどこんな可愛い女子高生と暮らせるなんて、めったにないことだし、ラッキーだよな。
ところが、いざ同居を始めて、気づいた。世の中に女の子ほど気まぐれでわけのわからない生き物はない。

＊　＊　＊

夕食が終わって、涼子ちゃんは席を立ち、片付けを始めた。
「あ、おれも手伝うよ」
涼子はこっちを振り返って、形のいい眉をわずかにひそめた。
「……いいわ。あなたの洗い方は、いいかげんだもの。お皿、流しに持ってきて。洗っちゃうから」
「はいはい」
「悟くん、返事は一度」
「はーい」
ちぇっ、どうなってんの？　ついさっきまで機嫌がよかったのにな。

2

「きゃ――っ！」
翌朝、おれは悲鳴を聞いて飛び起きた。
１階のほうからだ。あわてて２階の自室から飛び出し、階段を駆け降りた。
「おい、涼子っ!!　だいじょうぶか？」
涼子は凍りついたみたいにキッチンに立ち尽くしていた。
「悟くん……ゴ、ゴキ……ブリが」
どこにいるかは一目瞭然。一点を凝視して動かない彼女の視線の先、流し台の足もとに、大きなゴキブリが這っていた。
「よしっ、任せろ！」
おれはスリッパを持って、素早くゴキブリに叩きつけた。OK。完全に死んでる。
「ほら、もう大丈夫だぞ」
潰れたゴキブリをスリッパの爪先でつついた途端、涼子は再び悲鳴をあげた。
「いやーっ、そんなので触らないで！　早く捨てて――っ!!」
あわてて、おれはゴキブリをビニール袋に入れてゴミ箱に投げた。
「キャ――！　やめて、外に捨ててっ」
「いいじゃん、別にどこに捨てたって」
「いやよ、そんなとこにあるって思っただけで気持ち悪いもの！」
涼子はキッチンにうずくまって顔を両手で覆った。細い肩が震えてる。
「……もういや！」
突然、叫んだと思うと、彼女は立ち上がり、おれに詰め寄った。
「今まで我慢してきたけど、もうダメ。限界だわ。あなたって、どうしてそう、なにかにつけいいかげんで大雑把なの!?」
「なんだよ、それ！　おれのどこが大雑把でいいかげんなんだ」

この時ばかりは、さすがにおれもカチンときた。ゴキブリ退治をしてやったあげくに、その言いぐさはないだろ？

「すべてよっ！」

きっぱり言い放った彼女の大きな瞳が、怒りに燃えておれを睨みつけた。

「あなたって何も気にならないのね。だいたい、ここに置いてあるゴキブリホイホイ、いつのなの。さっきのゴキブリがこれを通り抜けていったのをわたし見たんだから！」

「あれ、いつのだっけ」

それを聞いた涼子は、ますます怒りをあらわにした。

「なんでそんなにズボラなの。あなたって何もかもそうよ！　靴下だって、どんな臭いがするか知ってるの？　そんなのをあなた、他の洗濯物と一緒に篭に入れて平気なんだもの。わたし、泣きそうになったわ」

「別に、涼子に洗ってくれなんて頼んでないだろ。自分の洗濯物は自分でやってるよ」

「くさいモノが投げてあって、放っておけるわけないでしょ！　臭いがついちゃうわ」

「なんだって、それでこの間はおれのパンツまで洗ってたのかっ!?　やめてくれよ！」

「あら、どうして!?　確かに変な染みがついててイヤだったけど……」

涼子はきょとんとして首を傾げた。天使のような眼差しがいたたまれない。おいおい、涼子。何も知らないで洗濯してるのか？

「……涼子って、兄弟はいなかったっけ」

「弟がいるわ。小学５年生。どうしたの、悟くん。急にしゅんとしちゃって」

涼子はおれの顔を心配そうに見やった。

「何でもない、おれが悪かった」

心の中で溜め息をつく。ああ、神様。おれのパンツが何で汚れてるのか、涼子が永遠に知らないでいてくれますように。

だって……いくら家庭の事情で親父の親友の娘を預かってるんだって、懸命に自制心を働かせても、おれはしごく健康な青少年なんだ。同じ屋根の下に、ひとつ年上の高校２年の美少女が眠ってるんだぞ。誰だってムラムラきちゃうよ。

２階にあるおれの部屋の、廊下を挟んだ向かい側に彼女の部屋がある。夜中なんかふと目が覚めると、涼子の寝息でも聞こえてきそうな気がして、思わず息をつめて耳をそばだててしまったりする。そんなことを考えてる自分に気づいた時、よけいに興奮して眠れなくなったりするんだ。

彼女が風呂に入っているときだって、用もないのに１階に下りて、冷蔵庫を開けてみる。深い意味も下心もないんだけど。すると、シャワーの音なんかがして……彼女が入浴してる場面を、思わず想像してしまう。

白い湯気の立ちのぼる浴室。細かい飛沫がすべすべの涼子の肌に降り注ぐ……（注・想像）。あう。ああ、なんて罪な娘なんだあぁ。彼女のほうは別段、おれを異性として意識してるふうもない。

おれが黙っていると、落ち込んでると思ったのか、涼子は自分から折れてきた。

「ごめんね、言いすぎたわ。ゴキブリがショックだったから。悟くんが汚いなんて思ってるわけじゃないのよ。ただ、もう少し気をつけてくれたら……それでいいの」

「もう少しって？」

「実はわたし、何でもきちんとしてないと落ちつかないの。例えばトイレのスリッパや、玄関の履物、あなたは揃えないでしょ？　キッチンをあなたが使った時も、わたしいつも後でこっそり片づけてたの」

「よくそんな面倒くさいことをするなあ」

おれは感心するというか、呆れた。

「潔癖症だとか、片づけ魔って、友だちにもよく言われるわ。でも、我慢できないの」

彼女はほうっと大きな吐息をついて、涙を一筋こぼした。

途端に、おれはなんか自分がすっごい悪者みたいな気になっちゃう。

「わかったよ、涼子。おれもこれからは注意する、清潔に心掛けるよ。でも、気がつかないこともきっとある。そんな時は我慢してないで言ってくれ」

「……悟くんの、バカ。鈍感」

小さな声で涼子はつぶやき、すっと立ち上がって、キッチンに向かった。

その朝の目玉焼きは、なんだかホロ苦い味がした。

今晩、じっくり彼女と話し合ってみようと思う。

＊　＊　＊

「わ――っ！　もうこんな時間かよ!?　遅刻だっ。何で起こさないんだよっ」

「起こしたわよ。でもあなたったら目が覚めないんだもん。わたしたちはお互い好きでも嫌いでもない、ただのルームメイト。自分のことは自分で責任を持つんでしょ。それじゃ、お先に。行ってきまーす」

素っ気なく言い残して、涼子は学校に出掛けてしまった。

昨日のことまだ怒ってるのかな？　だが、テーブルには、ほかほかの湯気をたてているコーヒーと、スクランブルエッグ、トーストが乗っていた。

「おれの朝食、用意してくれたんだ」

口で言うほど涼子が怒っているとは思えない。トーストと卵とコーヒーを一緒に胃に流しこんだ。涼子が見たら怒るだろうな。出掛ける前に、玄関にある伝言板を見てみる。

『朝はもっと早く起きて下さい。涼子』

「……ちぇっ、あいつ！」

昨晩、おれたちはいろいろ本音で話し合った。『言いたいことはその場で言う』のが、ふたりの新しいルール。それこそ、見たいＴＶ番組から、ごはんの食べ方に至るまで、気になったらともかく我慢しないってこと。

今まで全く違う生活習慣でやってきたんだ、そうすぐになじめるわけない。

（そういえば、結婚生活ってどういうのなんだろう？　楽しいはずだけど、やっぱり今まで他人だったんだもんな。人間って、本当に理解し合えるんだろうか）

おれはふと、そんなことを考え……

「あれ、何やってんだ!?　遅刻だーっ」

そんな場合じゃなかったってことに気づいて、あわてて家を飛び出したのだった。

3

数日が過ぎた。あれから、涼子と大きな衝突はしていない。

まあ、嫌われてるよりはましだ。相変わらず何かと細かいことで食い違いはあるけど、

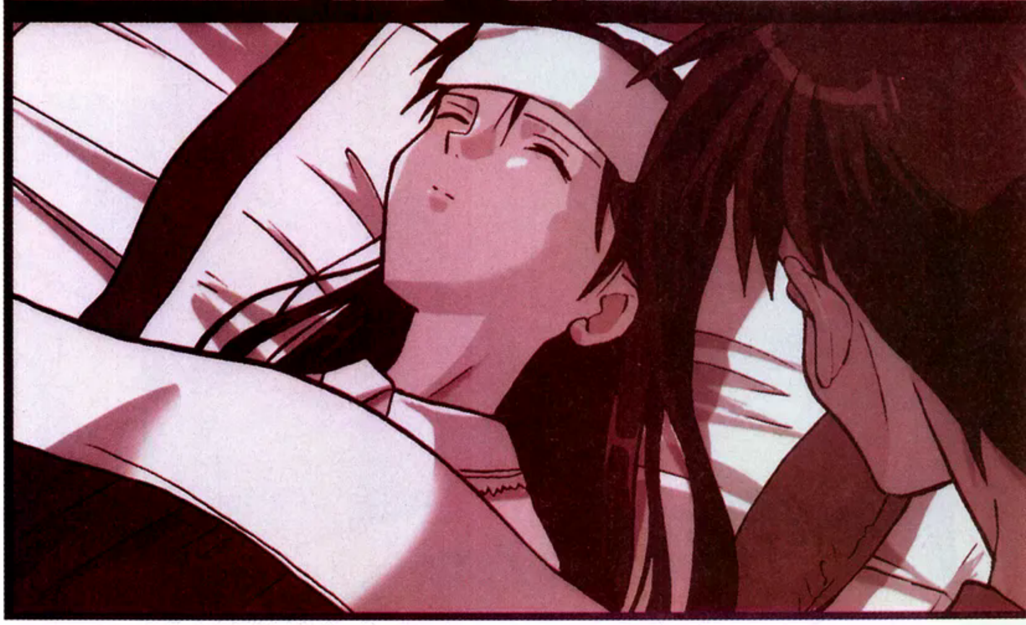


歩み寄り、理解し合う努力をしてる。
　彼女に何とも思われてないのは悲しいけどね。『好きでも嫌いでもない同居人』って言われたのはちょっとショックだった。
　とりあえず、今夜は飯でも張り切って作ってみよう。

＊　＊　＊

「……ただいま〜」
　P.M７：００、涼子が学校から帰ってきた。心なしか元気がないようだ。
「おかえり。どうしたんだ？　なんか顔色が悪いぞ」
　あれっ、涼子のコートがかなり濡れてる。今朝は傘を持って出たはずだけど。
「雨が降ってきたのか？」
「みぞれよ。そうだ、傘、電車に忘れてきちゃった……」
　ふらふらと涼子はブーツを脱いだ。
「うわ、ずぶ濡れじゃないか。早く風呂に入って、着替えて」
　タオルで髪を拭いてやると、涼子はぼーっとして、されるがままになっていた。
「風呂の湯、もう溜まってるよ。部屋にあがれるのか？　着替え、出してこようか？」
「うん、お願い……着替え、タンスの一番上の引出しにしまってあるから」
　いつも明るくて元気な涼子がこんなだと、おれも気が気じゃない。
　涼子を風呂場に連れていった後、おれは階段を駆け上がった。
　この家の部屋に鍵はついてないから、入ろうと思えばいつだって入れたんだが、そんな真似はしなかった。ともかくこんな時にためらってられない。
『RYOKO』とプレートのかかった扉を開いた。初めて、彼女の部屋に入る。
　最初に目に飛び込んできたのは、部屋のあちこちに置かれたグリーンだった。彼女が持ってきた観葉植物とハーブの鉢植えだ。
　ベッドと勉強机、本棚、タンス。
　女の子の部屋なんだなあと思った。ベッドの脇に、パステルカラーのクッションと、ぬいぐるみがさりげなく置かれてる。
　惜しいな、こんな時じゃなかったらという







いけない気持ちが脳裏をよぎる。それを振り払って、目的のものを探した。

汗を吸い取ってくれそうな生地の寝巻きは……っと。うお〜っ!? こ、こいつは……すごい、かっわいいネグリジェ!! おっと、そんな場合じゃないって。飾り気のないTシャツ生地の寝巻きと……下着はと。

なに!? し、下着だあ——っ!?

はたと我に帰ったおれは、カーッと顔がほてるのを感じた。あう、鼻血を吹きそうだ。涼子のヤツ、よっぽど弱ってるんだ。おれに着替えを取ってきてくれと頼むなんて。

おれはゴクッと息をのみ、引出しに手をかけた。ろくに中も見ないで、手近にあったショーツをつかんだ。見てはいけないような気がした。握った手の中に、白いレースの縁飾りがのぞいて、ドキドキした。

＊　＊　＊

風呂から上がった涼子は、少し元気を取り戻したようで、着替えを済ませておれのいるダイニングにやってきた。

「なんか食べられそう？　雑炊にしたんだ。これ食って、風邪薬を飲んでおきなよ」

おれは彼女を部屋に上がらせて、雑炊と風邪薬を運んでやった。

部屋をのぞくと、涼子は毛布にくるまって、ベッドの脇のクッションに座っていた。

少し頬が赤い。熱があるのかな？

「……ありがとう。わたしったら、着替えまで出してもらっちゃって、ごめんなさい」

（それも、下着まで）

という言葉は、涼子の喉まで出かかっていたのかも知れない。だけど、ふたりともそれには触れなかった。

「気にしないでよ。ほら、こういう時には、同居人って助け合うものだろ？」

「こんな時ばかり頼って、わたし、ずるいと思うわ。ごめんなさい」

涼子はまた少し泣いた。泣きながら、雑炊を食べた。きっと何か他のことを思っているのだという気がした。遠くへ転勤していって、離れ離れになっている家族のこと？

おれは黙って見守っていた。

話したくなったらきっと自分から言ってくれる。それまで待とう。彼女の心に土足で踏みこむようなことはしたくない。

さんざん『デリカシーに欠ける』とか『無神経でズボラ』とか言われつづければね、少しは学ぶさ。どんなに口では強気なことを言っても、やっぱり涼子って、かわいいもんな。大切にしてやりたい。

「薬、飲んだね。じゃあ、おれはいくけど。後で様子を見にきていいかい」

涼子は小さくうなずいた。

＊　＊　＊

心配していたとおり、夜中になって涼子は熱を出した。

昔、おれが風邪をひいたときに母がよくやってくれたことを思い出して、タオルを濡らして額に乗せてやった。

汗をかいているようなら背中や首筋を拭いて、温めてやったり、着替えさせてやる。

なんか、涼子がとても幼げで頼り無く見えて、痛ましい。いつも、こっちまで元気になってしまうくらい明るいのに。

結局おれは一晩中、枕もとにつきそっていた。明け方にはどうにか熱も下がり、涼子は安らかな寝息をたてはじめた。

その日、涼子は学校を休んだ。

彼女の学校に電話をしようとして、おれはふとためらった。『で、あなたと井上涼子さんの関係は？』なんて聞かれないかな？　ふたりは家族でも恋人でもない。ただの同居人だけど……説明するのが難しい。

「そうだ。この間、涼子が親友だって言ってた子がいたな。どこかに連絡先があった」

中山りえという、同じテニス部に所属してる子に、風邪で休むと届けを出してもらうよう電話した。りえちゃんは、おれのことは涼子から聞いていたそうだ。『涼子をよろしくね。あの子、結構、寂しがりやなの』と心配そうに言っていた。

うとうとまどろみながら、ときおり涼子はうっすらと目を開け、おれの顔を見ると、安心したようにまた眠りに落ちる。

涼子を放っておけなくて、おれは学校を休んでしまった。

午後になって、涼子はようやく目を覚まし

て、ベッドに起き上がった。
「……悟さん、学校……」
「ああ、きょうは創立記念日」
　自慢じゃないけど、おれは嘘が下手だ。
　涼子はおれの目をじっと見つめて、ふわり、と微笑んだ。
「ありがとう」

4

　で、その後、涼子とおれの関係に変化があったかっていうと、そうでもない。
　前よりはよく話すようになったし、笑顔も増えた。時々、すっごくご機嫌で出迎えてくれる。でも、女心ってのはくせものだ。ちょっとしたことですぐコロッと変わる。
　おれがうっかり食事のときにマナー違反をしたりすると、すぐに『最低っ！』って言われるんだ。
「ああもう、わかった、気をつけますっ」
「気をつけるって、悟くん、何度同じことを言ってるの。もう、しかたないのね」
　涼子はふっと溜め息をついて、おれを見つめ、クスッ、と笑った。
「これでいいのかな。ひとりは繊細で、ひとりは大雑把っていうのも」
「えっ？　今、なんて」
「知らない！　あなたはとても世話がやける人だってこと」
　涼子は笑顔のまま、席を立った。
「わたし、今朝は先に出るわ。今夜はりえの家に寄ってくるから、先に食べててね」
　涼子の親友の中山りえちゃん。おれも、涼子が風邪をひいた時に、学校に届けを出してもらうように電話で頼んだことがある。
「遅くなるって？　いつ頃さ」
「きょうのうちには帰ります」
　あれっ、涼子がはっきり時間を言わないなんて滅多にないことだ。どうしたのかな？
　おれは涼子が出かけたあと、日めくりのカレンダーをめくった。日付は２月13日。
　明日がバレンタインデーか。
　男と生まれて16年間、おれは今まで義理チョコ以外は貰ったことがない。
　涼子はチョコレートをくれるんだろうか。
ふと考えた。本音を言えば、義理でもいい。チョコは欲しい。くそ〜、バレンタインデーなんて、お菓子会社の陰謀だっ!!
　その夜、涼子はなかなか帰ってこなかった。遅くなるっていっても限度があるぞ。
　11時にもなって帰ってくるから、おれはうんと怒ってやろうと思ったんだが、
「ごめんなさい」
　って、ニコッと天使の微笑みで答えられると、何も言えなくなってしまった。

＊　＊　＊

　次の朝になって、おれは朝食のテーブルに意外なものを見た。
　赤いリボンをかけて、ていねいに包装された四角い包みだ。
　ま、まさか、もしやこれは……？
　チョコレートかっ!?



「思いがけない涼子からの贈り物。おれと涼子の物語はまだ始まったばかり——。」

　おれはリボンを解くのももどかしく、ガサガサと包み紙を開いた。
　そこには小さなホイルカップに絞り出され、ナッツを乗せたチョコ、トリュフチョコが幾つかに、カードが添えられていた。
『昨日、りえと一緒に手作りチョコに挑戦しました。恥ずかしかったから言えなくて、ごめんね。見た目は悪いけど味は保証します。試食済み。あなたに会えてよかった。これからも、よろしく』そしてカードの最後には小さく『DAISUKI』って書いてあった。
途端に、天にも昇る気持ち！
　涼子が、おれのためにチョコを手作りしてくれたんだ。
「おはよう！」
　キッチンに立っていた涼子が振り返って、にっこりと笑った。





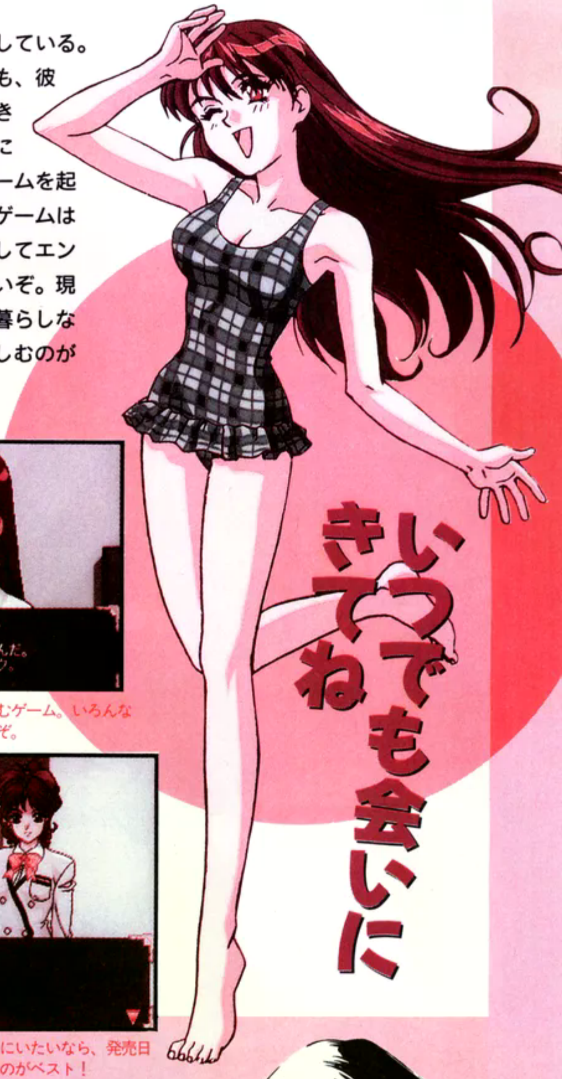
小説を読んでゲームに興味を持ったキミへ

『ROOMMATE』はこんなゲームだよ！

SS版『ROOMMATE～井上涼子～』は、2月14日㊎発売！

さてさて、小説版『ルームメイト』はいかがだったかな？　涼子ちゃんが気に入った！　好きになった！　会ってみたい！　そう思ったキミは、ゲームをゲットしなきゃね。ゲームさえ買えば、これでもう、涼子ちゃんはキミだけのもの♥

でもどんな内容のゲームなのかよくわからない、という人のためにその内容を説明すると、『ルームメイト』はリアルタイムの恋愛SLG。どうリアルタイムなのかというと、サターンの内蔵時計にシンクロしてゲームが進んでいくあたりがリアルタイム。涼子ちゃんは現実の女の子と同じように、自分なりの生活習慣を持って毎日を過ごしている。だから、たとえば昼間ゲームを起動しても、彼女は学校に行っているから会うことはできない。彼女と会いたいなら、彼女が学校に行く前だとか帰宅する時間を考えて、ゲームを起動していかなくてはいけないんだ。このゲームはジャンルこそ一応は恋愛SLG。でも、決してエンディングを見るためだけのゲームではないぞ。現実の時間の中で涼子ちゃんといっしょに暮らしながら、彼女とのコミュニケーションを楽しむのが目的のゲームなんだ。



いつでも会いにきてね



涼子ちゃんとの同居生活をリアルタイムにシミュレート！

▼家族の海外赴任を契機に、涼子ちゃんはプレイヤーの家に同居することに。彼女とのドキドキな同居生活の行方は？





▲彼女との会話を楽しむゲーム。いろんな話題が用意されているぞ。



▲彼女と少しでも長くいっしょにいたいなら、発売日当日にゲームを買って起動するのがベスト！

涼子ちゃんと♥になるにはコレを読め！

『ルームメイト～井上涼子～公式ガイドブック』

¥1,000（税込）
発売／メディアワークス

3月中旬頃発売!!

『ルームメイト』の公式ガイドが3月中旬に発売されるぞ！　いつゲームを起動したら涼子ちゃんに会えるの？　彼女とどんな風にコミュニケーションをとったらいいの？　どんなイベントがあるの？　などなど、ゲームをプレイしていて感じたキミの疑問にすべてお答えしちゃいます。ゲームの中では決して見ることのできない、涼子ちゃんの家の外での姿を描いたセル画やイラストも満載で、涼子ちゃんの魅力にとことん迫っちゃう♥　涼子ちゃんとの同居生活を、より楽しく有意義にしてくれる1冊だぞ。

